

Title	宋代地方都市における教育振興事業と在地エリート：紹興新昌県を事例として
Author	山口 智哉
Citation	都市文化研究. 9 卷, p.34-53.
Issue Date	2007-03
ISSN	1348-3293
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科：都市文化研究センター
Description	

Placed on: 大阪市立大学

宋代地方都市における教育振興事業と在地エリート

—— 紹興新昌県を事例として ——

山 口 智 哉

要 旨

宋代(960-1279)の地方士大夫は、婚姻などの多様な関係を構築しつつ、社会事業に参画し、地方での支配的地位を確立しようとした。一方、地方政府は、国家試験(科挙)と地方学校を通じた彼らの把握を目指した。本報告は、紹興新昌県を検討対象として、地方士大夫の教育活動と地方政府による学校整備事業を検討する。

本報告の検討結果は、以下の通りである。まず新昌県の有力氏族の動向については、石氏の活躍が目ざましく、北宋期より教育事業に尽力し、一族内外を問わず、多数の科挙合格者を輩出した。彼らは、地方はおろか中央の官界に及ぶ多様な関係を形成していた。南宋期になると、石氏以外にも多くの氏族が教育事業に傾倒し、石氏同様に私的教育施設を中心とした人間関係が構築された。一方、新昌県学の振興について、北宋期には積極的な活動がみられなかったものの、南宋時期になると、県知事の指導のもとで積極的な学校施設の整備が行われ、南宋後半期には、儀礼の整備や祭祀空間の設置が進められた。

科挙が社会に浸透すると同時に、大量の下第士人を生んでしまうという限界性を露呈しはじめる南宋時期は、地方社会に士大夫階層が形成された時期とみなされる。朝廷は、地方学校に彼らを収容・把握するような政策を実施し、県知事たちは、学校整備・振興というかたちでこれに応えた。地方官学の振興は、地方士大夫が私学書院に流れがちになるなかで、県知事たちが何とかしてこれら士人たちを把握するべく、打ち出された施策だったと考えられる。

キーワード：紹興新昌県、地方士大夫、私学教育、県学、儀礼空間

(2006年10月11日論文受理, 2006年12月1日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

1 はじめに

宋代(960-1279)以降の前近代中国における社会構造を論じる際、科挙が果たした役割を無視することは不可能である。なぜならば、そ

れまでの門閥主義的な階層原理を覆し、儒教的知識を抛りどころとする試験制度が採用された結果、より広汎な社会移動の増加が促進されたからである。この科挙制度を媒介にして生み出された新興勢力こそ、儒教的教養の修得とその

実践を当為とする儒教エリート——士大夫・士人階層——である¹⁾。

もっとも試験制度に過ぎない科挙それ自体は、儒教エリート階層の永続的再生産を必ずしも保証するものではない。それゆえにエリートたちは、階層内で諸関係を構築し、在地社会において社会事業に積極的に関与することを通じて、自己の社会的地位の安定・維持を図ろうとした。北宋期をへて南宋期にいたるまでの、エリート階層の“地方化”現象は、まさにこのような社会的背景にもとづいている²⁾。

このような地方エリート層の社会事業参画に関連して、宋代とりわけ南宋時期（1127-1279）においては、彼らが私設教育機関たる書院での思想的・社会的活動を重視し、書院を中核とした在地社会の経営を行ったとする見解がある³⁾。また教育史の成果をみても、北宋期（960-1126）における公立学校の振興と南宋期における私立書院の発展——公立学校の相対的機能低下——という図式がとくに提示されてきた⁴⁾。

たしかに、体制教学として公認される以前の朱子学が主として書院を中心に活動を繰り広げたことと、南宋中期以降の学校政策に関する史料の限界が、南宋時期の公立学校制度の把握を困難にしていることは否めない。しかしながら、南宋期における公立学校とりわけ地方学校（州学・県学）は、彼らがその同郷意識を確認する儒教的儀礼挙行の空間や「同舎」（学校の寄宿舎仲間）関係形成の空間として存在し、けっして軽視されるべきではない⁵⁾。むしろ近年では、私学書院の興隆の結果が官学との機能的同一化を推進したという理解が共有されつつある⁶⁾。このことは、南宋期を、元朝による廟学を通じた「儒戸」把握、および明清時期の郷紳階層の基盤を準備した変化の時期ととらえ、また地域教育のありかたについて、私学と官学を同時並行的にとらえていく視点が求められていることを意味する⁷⁾。

ただし、決して画一的とはいえない地方学校の整備・発達状況を考えれば、上述の課題は、個別事例研究の集積を通じた総体的把握が有効な手段となる⁸⁾。個別地域に関わる地方志や族譜、あるいは石刻史料といった地方の史料を

利用して、多様な人間関係を浮き上がらせ、教育施設をめぐる在地エリート層と地方官府との動向を追う。これは、南宋期の学校政策に関する史料の限界を克服する意義をも有している。

以上を踏まえつつ、本稿では、紹興新昌県の教育設備をめぐる地方官と在地エリートの動向を考察する。新昌県を選択する理由は、当地が宋に先行する五代時期（907-959）に設置された比較的新しい県として、宋代を通じて城壁や学校および水利施設といった県城の基本的な整備が連続と続けられたからである。新昌県に関する地方志は、宋代に編まれた『嘉泰会稽志』『宝慶会稽統志』『剡録』などに若干の記述が残されるほか、明代成化年間に新昌県儒学訓導であった莫旦の編纂した『成化新昌県志』が多くの知見を提供してくれる⁹⁾。本稿もこの『成化新昌県志』を中心に、宋代の地方志や明朝万暦年間および民国期に編纂された新昌県志を利用した。この『成化新昌県志』を積極的に活用して新昌県の有力在地エリートであった石氏の事跡を追ったものとして、陶晉生氏の成果を挙げる事ができる¹⁰⁾。本稿の石氏に関する分析もまた氏の研究に多くを負いつつ、新たに浙江省図書館所蔵の『南明石氏宗譜』の情報を加えてその詳密化を目指した¹¹⁾。

II 北宋期の新昌県

1 有力氏族¹²⁾の入植と新昌行政および教育の整備

新昌県は、浙東丘陵の中北部に位置する山間地である。北宋中期に中国に渡った日本僧成尋は、台州天台山への巡礼の途上で新昌県境内も通過している¹³⁾。蘇州の小島に着岸した彼は、杭州に移動、そこから钱塘江・浙東運河を經由して紹興府（当時は越州）に入り、続いて曹娥江を遡上する。途中、小船に乗り換え、さらに剡県¹⁴⁾へと至り、ここから轎（かご）に乗って新昌県を縦断、天台県との境界に位置する関嶺に到達した。これで約10日間の道のりとなる。成尋が船を下りて轎で移動したことからも分かるように、新昌県は、丘陵部の合間を縫うように東溪（新昌江）・黄沢江・澄潭江の3本



地図：現在の新昌県

※本図は『中華人民共和国地名詞典(浙江省)』(商務印書館, 1988年) 所載地図より作成。○印は鎮名, ◇は行論中の地名で位置が確認できるものを指す。

の河川が走るものの、水運には向かない。輸送・移動には、陸路が主であった。

山間地とはいえ新昌県は、紹興、台州、明州、そして真隣の剡県を経ることで婺州を結ぶ浙東陸上交通の要衝にあたる。その設置は、梁開平元年(907)に浙東地域を掌握した呉越国の錢鏐が、温州に通じる陸路を整備すべく、ヒト・モノの比較的豊かな剡県の東部13郷を割いて県を石牛鎮に設置、郷名のひとつをとって新昌県と名づけたことから始まった¹⁵⁾。すでに後漢・六朝期、中原をはじめとする各地から曹娥江流域への入植が盛んであったこと、あるいは仏教聖地である天台山に隣接し、県域内にも多くの寺院を抱え、成尋のような巡礼僧の往来も盛んであったことを考えれば、その交通上の基礎は、早期にできあがり、石牛鎮といった鎮市を中心とする小規模の経済圏も形成されていたようである。

人々の新昌県移住の記録に関して、『成化新昌県志』巻11、氏族の項目、および新昌県志編纂委員会[編]『新昌県志』(陳百剛・王伯祥

主編, 上海書店, 1994年)には、当地の有力氏族が新昌県に移住してきた由来および族内の著名人の肩書きなどが記されている。たとえば丁崇仁(原籍は山東濟陽)は、後漢後期に剡県令となり、党禍を避けて新昌県南洲に居住(南洲丁氏始遷祖)、また王超之(原籍は山東臨沂)は、王羲之の4代孫にあたり、もともと剡県に住んでいたが、剡溪上流に遊んだ際、長潭(澄潭)に至り、当地の山水が気に入って、そのまま居住するようになった(澄潭王氏始遷祖)。このようなごく早期の移住のほか、唐・五代期から宋代にかけての移住概況をみると、表1のようになる。これらの事例から、いくつか確認しておこう。

まず史料源の性格から官僚身分保持者ないしはこれに準じる地位にある者の移住がほとんどである。次に彼らの移住は、唐末の黄巢の乱や北宋末の混乱など、戦乱を避ける目的で行われる事例が多い。その一方で新昌県内にある景勝地を遊歴した折に定住を決める場合もある。なお、原籍に山東出身が多いことも特徴である。

表1 新昌県の有力宗族の移住

No.	移住者	原籍, 移住の時期・理由, 移住地など
1	梁山宝	晋代に前梁（もともと新昌県域）に移住してきた梁万（原籍は四川潯州黔江）の14代孫にあたり、唐貞観15年（641）に新昌県内に定住。
2	石元遂	原籍は山陰（紹興）。唐文宗開成2年（837）に石牛鎮（西門外）に定住。裘甫の反乱が起こると、黄壇に移住、後に子孫が県内の諸処に移る。
3	呉融	原籍は山陰（紹興）。唐龍紀年（889）の進士。戸部侍郎などを歴任した後、山陰に居住。剡県・新昌県附近に遊んだ際、定住。
4	俞珣	原籍は山東青州。唐末に剡県令となり、黄巢の乱を避けて新昌県に移住。
5	丁振卿	唐末の黄巢の乱を避け、山陰県（紹興）より彩烟墓塘園に移住。後に子孫が県内の諸処に定住。
6	潘義紉	原籍は山東諸城。後梁開平2年（908）、新昌県の設置に伴い、辟召に応じて新昌県に移り、城内の錦坊坊に居住。後にその子孫が県内の諸処に定住。
7	陳顯	原籍は山東青州。後梁開平年間に新昌県丞となり、そのまま城中の前山根に定住。
8	黄範	原籍は建寧浦城。後に婺州に移り、五代期に新昌県に定住。
9	胡璟	五代期に并州から来て呉越王に仕える。後に新昌県に隠居。
10	陳孺文	後梁の兵部侍郎。五代末に赤城（天台）に遊び、帰途、県内の平壺に定住。
11	何茂	五代呉越国の軽車節度使。青州から新昌に移り、学宮の左にある候仙門内に居住。
12	張質	原籍は杭州銭塘。呉越の侍御史となり、党禍を避け中溪に隠居。子孫が新昌に定住。
13	張公良	原籍は山東寿光。北宋の太平興國中（967-984）に新昌県知事となり、彼の死後、子の張伋・張信らがそのまま定住。
14	袁元	原籍は汝陽。宋咸平初、新昌県知事となり、そのまま定住。
15	呂億	原籍は山東青州。北宋末靖康年（1126）、金兵が侵入、当時温州に住んでいた呂億は妻の父に随って新昌県に移住。
16	王紳	原籍は山東東昌。宋の南渡に随い、前梁（新昌県境）に移住。その6代孫が南山に移住。
17	徐点	高宗に随って南渡した徐鉉の5世孫。新昌に移住し、子の徐富は大理評事となる。
18	章木	南宋紹興24年の進士。岳州推案に任じられ、トラブルを避けて新昌県天姥山に遊び、そのまま県内に居住。その後、3人の子がそれぞれ嶺頭・県城内・上礼泉に移住。
19	張杓	張浚の次子。県治の東に卜居し、その子孫が県城内に定住。後にその後裔が県内の諸処に移住。
20	張珣	原籍は四川綿竹。南宋の宰相張浚の後裔。南宋の開慶年間に新昌県知事となり、子孫が新昌県に定住。
21	王喲	王欽若の6代孫。南宋の淳祐年間に知新昌県事。後に子孫が新昌県の諸処に定住。
22	劉運富	原籍は山東高唐州。宋代に上虞県の五夫務大使に赴任、新昌県南明山に遊び、その山水の美しさに魅かれてそのまま定住。
23	張鼎新	原籍は江西南昌。宋末に新昌県尉となり、山水の美しさに魅かれてそのまま定住。

ただ六朝期以来の会稽という土地柄と何か関係があるのかもしれないが、詳しい理由については不明とせざるをえない。

戦乱などの差し迫った危機によらないと考えられる移住パターンが2つある。ひとつは、近隣の剡県に定住していた者が新昌県内——県設置以前であれば剡県奥地への移住ということになる——に移る事例である。これは曹蛾江（剡溪）下流域から中流域を経て剡県へ、そして新昌県域へという移住開発の流れに沿ったものと考えられる。いまひとつは、五代から宋代、すなわち新昌県設置後の移住について、先に述べた移住開発の流れに沿いつつも、まず県城内に居住し、それから子孫が県内の諸処に散らばる

事例がみえる。新昌県という行政都市ができた結果、県政に携わる人間（11・13・14）が赴任ないしは6のように辟召に応じることで新昌県に移り、そのまま定着するという、新しい移住のパターンができたといえるだろう。

五代から北宋時期にかけての新昌県城については不明な部分が多いものの、『嘉泰会稽志』や『成化新昌県志』の記述を参考に、当時の新昌県城を俯瞰してみよう。六朝時代より宝相寺や七宝院といった寺院が建立されてきた石城山（後に呉越王銭鏐によって南明山と名づけられる）の北側には、比較的平坦な土地が広がっている。石城山とともにこの平地を挟んでいる東溪の間地が、かつての石牛鎮、すなわち後梁開

平2年に新昌県城が置かれることになった場所にあたる。ただし、県が設置されたとはいえず、初期のそれは城壁も行政庁も、まして学校などがあるわけでもなく、いわゆる市場集落としての形態を超えるようなことはなかったと考えられる。

なるとなれば、新昌県治（行政庁）が創設されたのは、じつに建県以後70年あまり経過して、宋太平興国年間（976-984）に張公良が県知事として赴任してきた時だとされるからである（『成化新昌県志』巻13、来宦）。彼は、同時に県治の東隣に学校も設立し、北宋期新昌県における行政官署の基礎を作り上げた。その建設に際しては、「邑士」の石賀が民衆の負担を肩代わりして私財を投じたという。また石賀は、後に張公良が当地で斃れ、その子孫が棺を守って帰郷することすらままならない事を知ると、ふたたび土地を提供して墓所を作らせた。子孫はそのまま新昌に定住することとなった。

それでは、この新昌県学の教育効果は、どの程度であったのだろうか。新昌県の規模を考えれば、宋初の段階で十全なる教育空間を備えるような学校が建設されたとは考えにくい。手がかりとなる史料は少ないが、皇祐年間（1049-1054）に、張公良の曾孫にあたる張臺が「邑庠生」（県学生）となり、何度も科擧の地方試験には通過するものの、中央の試験には合格しなかった（「屡擧不第」という記録が残っている（『成化新昌県志』巻16、遺才）。また『南明石氏宗譜』の石待賀の項目にも、「景祐2年（1035）に県知事の張公が県庁の老朽化が激しいのを見て改築を考えた。そこで石待賀がこれを援助し、瞬く間にできあがった。また孔子殿・明倫堂・両廡・齋舎を修築した」とある¹⁶⁾。このように皇祐年間、范仲淹が地方学校の振興をさげんだ慶暦改革後でもあり、新昌県学でもある程度の教育活動が行われていたであろうことは否定できない¹⁷⁾。しかしながら、新昌県内の教育を担う存在として、影響力を及ぼすものであったとは考えにくい。

このことは、北宋期新昌県における石氏の私学教育が新昌県学を補って余りあるような活躍をみせていたことからもうかがえる。次に、この石氏の活動についてみてみよう。

2 新昌石氏の活躍

新昌石氏は、石氏始祖とされる石万君の35世孫にあたる石元遂が唐文成2年（847）に剡県から新昌県石牛鎮に移ってきたことに始まる。咸通元年（860）に裘甫の乱が起こると、彼は、難を避けて石牛鎮から山間の黄壇に移った。その後、39世孫の石文渥が、慶雲祠を県城内の西に建てて石元遂をまつり、祠後に奉先庵および祭田を、祠の側にあった宝巖寺（後晋開運2年〔945〕に趙仁爽が建立）に附郭の民田を寄進したという。当時の石氏は、すでに新昌県内の諸処に広がっていたが、始遷祖である元遂をまつる慶雲祠の建設は、県城内を中心とする新昌石氏の族的支柱が成立したことを意味している。なお、石文渥のように寺院に対する援助は、石延翰（38世孫、治平3年〔1066〕に田56畝を寄進して保福寺を復建）や石文湛（39世孫、錢10万貫を寄進して宝相寺を修築し、銅鐘を鑄造）なども行っている。石氏が宗教を介した一種の公共的空間に対して積極的に関与しようとしたことの現れであろう。

北宋時期の新昌石氏の活躍を特徴づける人物こそ、この石文渥の子・待旦である。彼は、天禧3年（1019）に進士合格を果たしたが出仕せず、郷里の新昌県石溪の山水の間に居住して後進の育成にあたった。彼の教育の場こそ、咸平年間（998-1003）に創建されたという石溪義塾である。石溪義塾は、それぞれ上・中・下書院とよばれる3つの区域に分かれ、そこで彼はみずから教師として授業を行いつつ、子弟に衣食を支給した（『成化新昌県志』巻6、義擧、石溪義塾）。陶晉生氏の研究による、石氏の一族が北宋期に22人、南宋期に17人の進士合格者を輩出したという事実は、まさにこの義塾に代表されるような教育の伝統によるところが大きい。

この義塾の内部構造は、『成化新昌県志』に採録される「石溪義塾図」から分かる（図1参照）。これによると前門を入れば左右に下院と中院が、奥に上院が位置する。下院と中院には、それぞれおそらく講義が行われた場所である育英堂と升俊堂があり、個々に膳堂（食堂）も設けられている。上院には、中央に孔子を祀っていたと考えられる宣聖殿がそびえ、その奥には、

すばらしい景勝であったという議善閣、伝心閣、万卷堂（書庫）、膳堂（食堂）、さらに最奥部には射圃も設けられている。ここで注目されるのは、宣聖殿の存在である。一般に孔子に対する祭祀は国家の専管事項であり、一般的な私設書院で孔子廟を有するものは数少ない¹⁸⁾。すなわち、この石溪義塾は、地方官学と同じような構造を持っていたのであり、単なる私設の教育機関という範囲を超えた、きわめて公共性の高い教育の場であったとみなしうる。

その一方で、この石溪義塾を舞台とする人々の交流の諸相を知る史料は、極めて少ない。『成化新昌県志』巻6、義挙、石溪義塾を参考にすれば、石溪義塾では、石待旦がみずから教鞭をとり、後に弟の程顥とともに道学の祖として名高い程顥を講師に招いて塾の管理を任せた。四方からの来学者は、数百人規模で、うち進士登第を果たした者が76人、この中には、後の宰相となる杜衍・文彦博・韓絳・呂公著といった人物が含まれた。その後は、子孫が先志を継ぎ、70余年に渡って人材を養成しつづけたという。

また同巻12、郷賢、石待旦の記述によれば、頭官に昇る者が72人おり、郷薦すなわち地方試験に合格した学生ともなれば数え切れなかったとある。

厳密に言えば、これらの記述は信憑性に乏しい。石待旦の門人で、彼の文章と徳行を朝廷に上表したという4人について、彼らの生卒年や科挙登第年を考えれば、杜衍（978-1057、山陰人、大中祥符初〔1008頃〕進士）、文彦博（1006-1097、汾州介休人、天聖5年〔1027〕進士）、韓絳（1026-1082、開封雍丘人、慶曆2年〔1042〕進士）、呂公著（1018-1089、寿州人）となり、活躍した年代が共通しないからである。『嘉泰会稽志』巻18、拾遺、万卷堂の注記も、この説を「俗伝」として紹介しており、陶晉生氏は、この4人について、同じ越州にある山陰県出身の杜衍を除けば、その所説は誇張が過ぎているとみなす。また『万曆新昌県志』巻9、寓賢にも、この問題について検討が加えられており、この4人が程顥のもとで学んだという記述——これは『成化新昌県志』巻6、義挙、石溪義塾に依拠したもの——は、杜衍・文彦博が程顥（1032-1085）よりも年上であること、および程顥・程頤がかつて韓絳・呂公著の友人であったことを挙げ、俗説ないしは誤記であろうと推測する。さらに呂光洵という人物の、旧志（『成化新昌県志』）は時間的な前後関係が考慮されていないという意見を紹介したうえで、当時、石氏の人間で高官にいたる者は多かっただろうから、その際の著名人との交流の跡が文章などに残されて石氏の家に伝えられ、このような穿った説ができあがったのではないかと述べる。

それでは実際の石氏一族の婚姻関係について、陶晉生氏の研究を参考にみてみよう。新昌県内の名族である呂氏や黄氏との婚姻以外に、中央政界で高官となった人物関連では、宋祁の次男・宋広国（慶曆2年〔1042〕進士・石衍之の娘婿）、銭若水の孫にあたる銭緯（娘が石宗彝に嫁ぐ）、劉器之（母親が景祐元年〔1034〕進士・石垂之の娘、石溪義塾に遊学経験あり）、慕容彦逢の弟・慕容叔崎（熙寧6年〔1073〕進士・石景衡の姪が嫁ぐ）などが挙げられ、あるいは石端礼が哲宗の娘・陳国公主の夫となっている。

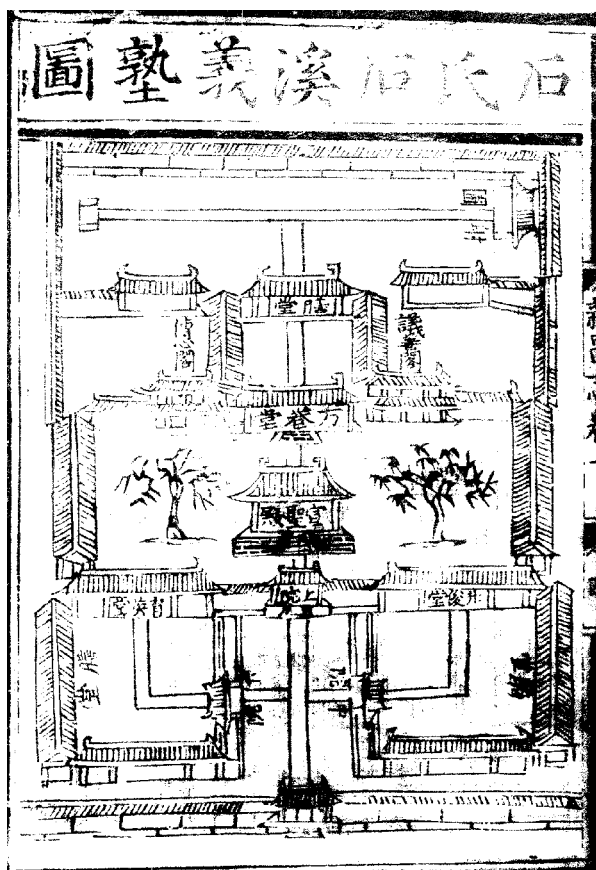


図1 石氏石溪義塾図

新法党関係者では、陸佃（妹が石徽之に嫁ぐ）や呂惠卿（娘が元豊5年〔1082〕進士・石景術に嫁ぐ）が石氏と姻戚関係にあった。そのほかにも、睦州遂安の詹氏、杭州銭塘の章氏、明州の馮氏や楼氏、越州の諸葛氏や史氏および陸氏（陸佃を輩出した一族）といった、両浙地域を中心にした婚姻関係が結ばれていたという。

石氏と婚姻関係を結んだ士大夫のうち、銭塘章氏について、章驤『銭塘章先生文集』（武林往哲遺著）附録に載録される章驤の墓誌銘（陳師錫撰「宋故左朝議大夫致仕上柱国隴西県開国子食邑五百戸賜紫金魚袋章公墓誌銘」）と『南明石氏宗譜』から補足しておく。章驤は、石待旦の末子・石秀之の次女を妻とし、石衍之（石待旦の弟・石待挙の長男）の夫人である史氏や石秀之、およびその妻・胡氏の墓誌銘を撰するなど、石家との関係は深かった。なお、章驤の撰した「石奉議墓誌」（『銭塘章先生文集』巻16）によれば、この石秀之は、石待旦の創設した教育施設内でもっとも勤勉であり、その後、宝元元年（1038）に進士登第を果たしたとある。さて章驤は、17歳の時に王安石に謁見して、その才能を認められる。その後、元祐初（1086頃）にも、諸路の使者として適任な者を推薦するよう詔が降されると、韓維・鄧潤甫・李常・楊汲らがこぞって章驤を推薦し、利州路転運判官となった。そして各地の路官を転々とした後に致仕し、崇寧4年（1105）に73歳で没した。こうしてみると、章驤もまた新法派に近い人物との交流のなかで官僚生活を送っていたことがうかがえ、北宋後半期の石氏の交流と共通する部分がある。

以上に挙げられた婚姻関係の事例をみると、石姓人物のほとんどが進士登第者であることがわかる。ここから次の2点を確認しておきたい。ひとつは、石氏一族が経営する教育施設で研鑽を経た成果であるということ、ふたつには、そこから獲得された進士身分が著名な士大夫との婚姻の契機となっていることである。このことは、進士身分の有無が石氏を含めた当時の人々にとっていかに重要視されていたかを示しており、逆説的に、多くの進士合格者を輩出したがゆえに、石溪義塾は、著名な存在となりえたことを意味する。それゆえに石溪義塾には、多く

の学生が集い、結果として石氏の22人を含めた合計70人あまりの進士登第者を生み出したのである。残念なことに、石溪義塾から輩出された非・石姓の進士登第者約50人の姓名や出自がほとんど明らかにできず、その交流の拡がりには、判然としない¹⁹⁾。それでも、石溪義塾という教育空間が、進士登第を目指す読書人たちの集う場所となっていたことは揺るがないと思われる。

本節の最後に、新昌県学と石溪義塾の関係について述べておこう。その内部構造といい、進士登第者の題名碑の存在といい、石溪義塾はまさしく新昌県内の教育を担う存在であった。先述した、新昌県学に関する状況が把握しがたいというのも、このような背景に基づいているのではなかろうか。北宋期は、范仲淹の慶曆新政や王安石の新法改革など、たびたび学校教育に対するテコ入れが行われている。とりわけ、北宋末徽宗朝には、天下三舍法が施行され、全国に州県学が設置されたという²⁰⁾。それ以前の学校改革が州学までか、規模の比較的大きい県学までに限られていたことを考えれば、この意義は大きいと思われる。ところが、新昌県学についていえば、この時期の学校の記録は、まったく残されないのである。

たしかに、久しからずして両浙地方を揺るがした方臘の乱によって、県治や県学もまた灰燼に帰すにいたったことが大きな原因のひとつに挙げられる²¹⁾。しかし、より大切なことは、新昌県城からわずか8里（4キロ）という卑近な場所に立てられた石溪義塾の存在ではなかったか。新昌県城内に居を構えた石文渥と、その子・待旦は、県城から南へ4キロの山紫水明の地であった石溪に義塾を設け、教育活動を展開する。ついでにいえば、石待旦の子・垂之もまた、県城の西2キロにある鼓山（別名を石鼓山）に屋室を築き、読書の場所としたという（『成化新昌県志』巻3、山川、石鼓山）。県城を中心としながら、附近の山川のなかに住居を構えて、教育や読書に励む新昌在地エリート・石氏の姿がそこにある。新昌県学が本来行うべき教育活動は、まさに石溪義塾で展開された教育や人々の交流のなかに埋没していたといえよう。

III 南宋期の新昌県

1 官学の推移

方臘の乱による破壊をうけた新昌県城は、紹興13（1143）年ごろに、県知事として赴任してきた林安宅という人物によって一大整備が加えられる。近世新昌県城の基礎を築いた彼の都市整備を列挙すれば、次の通りである。

まずは①東堤を整備したこと。これは県の東側から北側を流れて剡県に注ぐ東溪の洪水被害を抑制すべく設置された。南宋期には、その後、宝慶年間（1225-1227）の知県である趙時佐、咸淳年間（1265-1274）の知県である呉均佐が修築を行っている。なお、この東堤が城壁のようであることから、後に新昌県には、南宋時期に「周十里，其の高さ十丈，其の厚さ十有二尺」という城壁があったと誤解されたことがあるようである（『成化新昌県志』巻3，山川，東堤）。次に②県郭内に七星井を掘削したこと。七つの井戸が掘られ、日照りにも枯れることはなく、日常水として申し分なかったのも、人々はこれを便としたという（『成化新昌県志』巻3，山川，七星井）。それから③孝行碶の開削。県城の東にある拓溪の水を引いて西に流して県郭に導き、光鼓潭の下流に流して三溪に入れることで、田13000畝を灌漑したという水利施設（『成化新昌県志』巻3，山川，孝行碶）。『万曆新昌県志』の記載で再確認すると、県城の東2.5キロの地点にある虎隊嶺から流れを引き入れ、東洞門に入れて南門を巡らせ、そこから西に流して大仏橋から三溪碶に入れるというもので、長さ5キロ余り、附郭の民はいずれもこの恩恵にあずかったという灌漑水路である。以上の3つの施策は、いずれも水利に関するものである。このほか、④義田を設置したり、⑤鼓山真聖観を建立したりするなど、新昌県城の整備に力を入れている。

そうして、水利事業と並んで特筆されるのが⑥県学の復建であった。ここでは、林安宅「新昌県新建儒学記」からその経過をみてみよう（『成化新昌県志』巻5，学校，儒学）。もともと県学は、県治の東にあって狭隘であった。宣和3年（1121）における方臘の乱によって県学が破壊されると、しばらくは県の東堂を仮住ま

いとして孔子をまつり、紹興6年（1236）には県西の武尉の屋舎に一堂を仮に建てて、祭祀を行っていた。このような状況であるから、孔子“殿”や生徒が学問をする齋舎といった施設を修築するなど、とても余裕がなかったのだという。そうして、林安宅が赴任すると、民情を視察し、県学がないので、風水があつまらない（良い人材が生まれない、の意）という民の意見を聴き、建学を決意した。そこで新たに県の東南部に吉地を卜居（地相の良悪を占って建設場所を決めること）し、建設準備にとりかかった。宝相寺・九峯寺から寺山の木材400株を、慧雲寺・広福寺からは竹箭800束を得、建設や運送の費用から大工や労役および建築資材の費用にいたるまで、すべて県がまかなって民からは一切徴発しなかった。県学は「前門後堂」式で、齋が東西に列なり、殿がその中央に座している。5月に着工し、10月には落成。彼は、諸生を集めて学業に勉励するよう訓戒を垂れたという。

なお、林安宅の建学時期である紹興13年（1143）前後は、中央政府（当時は秦檜専権期）において道学派楊時の弟子にあたる高閔によって文教政策が推進されていた時期と一致している²²⁾。つまり、新昌県学の修建は、中央政府の施政方針にかなった学校建設だといえよう。また、この林安宅という人物についてみておくと、彼は三山（江蘇江寧県）の出身であり、先述した諸事業によって「宋中興より県に功有る者、安宅もて最となす」と評価された人物である²³⁾。その後、士民が彼の徳を慕い、県東2里の東堤上に止水廟を建てて彼をまつたという（『成化新昌県志』巻7，祀典，止水廟）。

さて、林安宅の建学以後も、新昌県学は幾度か修築が行われていく。新昌県出身の黄庠の記録（『成化新昌県志』巻5，儒学，大成殿所引「重建大成殿記」）によれば、まず紹興28年（1158）に県知事となった虞以良が、県学がしだいに傷んできているのをみて修繕を行った。また嘉定4年（1211）には、知県の詹公（名字不詳）が県学の修理を計画したが志半ばにして死亡してしまう。その2年後、新昌県知事として赴任してきた銭宏祖が再び重建計画を立ち上げると、学生たちが父兄に援助を請い、そこから得られた資金をもとに嘉定7年（1214）、新しい大成

殿や学舎が建築された。

さらに南宋後期になると、このような県学の重修と平行して儀礼制度の整備が顕著となっていく。まず注目されるのが知県丁璫による積奠——孔子に供物を捧げる儀式——の制定である。嘉熙3年（1239）の冬に新昌县知事に赴任した丁璫は、翌年春の積奠挙行の際、その儀式で使用される器や儀式次第、あるいは犠牲がいまだに備わっていないことを嘆き、儀式の是正を決意する。そこで所蔵の元符・政和年間に頒布された儀式書、職事人²⁴⁾の黄君が見せてくれた淳熙年間に頒降された新儀、および県丞の柳君が手に入れた処州州学のマニュアル（纂定須知）をもとに、儀式次第・犠牲の内容・礼器などを一新した。この際、礼器については、范金という人物が新昌县に優秀な鍛冶屋がないことを理由に、陶器や木製品で揃えたという。明くる年の春、丁璫は新製の積奠を実施したものの、後世に忘れ去られてしまうことを懼れ、礼器や道具の配置、儀式次第、礼器の型、犠牲の規則などを県学に刻石することにした。以上のような刻石の経緯を含んだ碑石は、淳祐元年（1241）に完成し、現在でも『越中金石記』巻5に収録されている（「積奠儀」「積奠図」「礼器図」「割牲図」）。

そうして宝祐元年（1253）には、知県王世傑がふたたび学校を重修し、先賢祠を設置した。『成化新昌县志』巻5、学校、儒学所引「郡人韓境修学記」によれば、風俗を変えて教化することを重んじる王世傑は、郷貢進士の俞彬・黄飛・俞公慥・張漢英・石墳らと分担して事にあたり、学舎を整備し、新しく講堂を建て、四書をもって毎日学生のために天理・人欲の議論について講義した。英俊な弟子がいれば、抜擢して教育にあたらせ、郷土の先賢たちに賛辞を著して祠にまつり、また師友淵源祠を建て、徐公僑なる人物が朱熹を祭祀するようすすめている²⁵⁾。王世傑「新昌县学重建講堂記」（『成化新昌县志』巻5、学校、明倫堂）には、先賢祠の設置とともに、郷飲酒礼を挙行し、大・小学を開き、その後、改築の余裕のなかった講堂を新しくした、とある。王世傑が理学教育を推進した結果、新昌县学には隣県からも学生が集まり、数百人も規模になった。そこで人々は、王世傑の生祠

を建ててその徳を称えたという（『成化新昌县志』巻13、来宦、王世傑）。

このように新昌县学には、様々なかたちで儀礼空間が形成されていった。まず丁璫が整備した積奠は、主として春秋上丁の日、地方長官が祭主となって孔子に供物を薦める儀礼である。儀礼の遂行上、積奠には地方官府の属官と官学の教師や学生たちも参加していたが、当該地方の有力者が参加していたかどうかははっきりしない²⁶⁾。ただし、銭宏祖の学校重建時のように、学生たちの“父兄”が、公共事業に資金を提供しうような有力者階層に属していたわけで、積奠を地方官府内の、ないし官学内の儀礼活動としてのみ理解することは不適当であろう。

次に郷飲酒礼は、地方の士大夫（寄居者を含む）と地方官が特定の期日に学校に集合し、飲酒礼を行うものである。南宋期、郷飲酒礼は、浙東とりわけ明州を中心に盛んに行われている。南宋初期には、明州士大夫が中心となって科挙・学校改革の一環として全国展開が目指されることもあった。南宋後期になると、郷飲酒礼は、各地方の裁量で実施されることが多く、その内容も民衆教化を目指したものが多くなる²⁷⁾。郷飲酒礼は、その“郷”という文字に表されるように、地方の士大夫が儀礼に参加することを通じて地方社会の秩序が表象される空間であった。

また郷の先賢をまつたという先賢祠は、全国的に内部構造の画一的な県学の祭祀空間の中で、最も地方色があふれた空間となる。古くは『礼記』祭義篇に「先賢を西学に祭る」とあるものの、その存在が地方の学校にもはっきりと確認されるようになるのは、宋代とりわけ南宋期以降である。新昌县学の場合、王世傑が奉祀した人物は、石待旦・石公弼・石公揆・石愨・黄度・石斗文・石宗昭・文彦博・呂公著・杜衍・韓絳・林安宅の12人であった（『成化新昌县志』巻5、学校、郷賢祠）。石氏や黄氏は、まぎれもない新昌县出身であり、郷里の学術活動に大きな影響を及ぼし、あるいは中央政府で活躍した人物が対象となっている。ところが実際の先賢祠には、これら石氏や黄氏のほかに、かの石溪義塾に遊学したとされる4人の宰相経験者と、南宋初期の県知事である林安宅が含まれ

ている。これについて王世傑は、杜・文・呂・韓の4人がいずれも一代の偉人であるということ、および林が県学を創立し、風俗教化を推進した人物であるという理由を挙げる。

興味深いことは、王世傑がこの石・黄両氏の賢者・有徳者すなわち祭祀対象の後裔に先賢祠の管理を要請した、ということである²⁸⁾。他地域の事例ではあるが、平江府（蘇州）の府学では、「掌祠」という先賢祠の管理職を設け、祭祀対象の後裔にあたる学生をその職に充てて、管理手当を支給している²⁹⁾。新昌県の場合、石・黄両氏の賢者・有徳者が学生であったかどうかは不明であるが、彼ら新昌県の有力エリートが県学と何らかの関わりをもっていたことは間違いない。先の郷飲酒礼の実施と併せて、この当時の県学内には、石氏や黄氏といった新昌エリートが集い得るような空間、“郷（郷里）”の秩序空間が形成されていたということをもものがたる。こうした新昌県学の儀礼空間整備は、続く元代にも受け継がれ、明代に入って、改めて一大整備が実施されることとなる。

宋代新昌県学に関する最後の史料が、徳祐元年（1275）に邑人兪公美によって撰述された「新昌県主学序記」である。ここで注目されるのは、周や漢唐の学制について述べた後の、次の文である。

我が宋朝では、慶暦年間に天下の州県に詔を下して、いずれも学校を創立させた。その後、州には校官がいて学政を治め、県学では知県やその属官に学事の責任を負わせたが、（県学へは何かと忙しくて）赴くのも面倒で、教育も怠るようになった。そこで景定4年（1263）に、はじめて諸県に詔を下し、いずれも主学一員を置くこととした。漢の経師や唐の博士がこれである。

宋朝では、長らく知県ないしはその属官が県学の管理監督を行うという体制を採用していた。この場合、県学の教育は、県知事が才藝有る者に要請するか、あるいは県知事みずからが教授することが多かった。ところが景定4年、全国的に専門の官員を朝廷から派遣するという詔が下る。こうして徳祐元年までに、「老師・

宿儒」と表現される県学の教育に携わる関係者もまた主学下の職員として置かれ、5人の主学が従事したという。この碑文は、主学設置後も官舎が未整備であった景定5年（史料では「咸淳甲子」に作る）に、知県の謝在杼（理宗謝皇后の従姪にあたる）が戴嘉という人物の提案に応じて、主学の官舎を創設したことにちなんで書かれたものである。

景定4年における学校管理制度の変更については、袁征氏の研究からその梗概を知ることができる³⁰⁾。この制度は、特奏名進士第三等以下の者を各州県学の主学に任命するという全国的な教育制度の変更を指す。これと同時に、『宋史』巻45、理宗紀、景定5年夏4月辛亥条には、州県に郷飲酒礼を挙行政をせよという詔勅が下っている。県学機構の充実と州県に出された郷飲酒礼実施の詔の背景には、宋王朝の県学教育制度、ひいては宋朝の地方支配のあり方が一歩進んだことをうかがわせる。南宋最末期に施工されたこの制度は、元代、続く明代の学校制度にどのような影響を及ぼしたのか、今後の詳細な検討が必要となろう³¹⁾。

このようにみえてくると、南宋期における新昌県学は、国家の科举・学校政策の影響を受けつつ、順調な発展を遂げてきたといえよう。このような新昌県学の発展は、それでは新昌社会の中にどのように位置づけられるのであろうか。このことを明らかにするべく、節を改めて、南宋期における新昌エリートの活動についてみてみよう。

2 新昌エリートの教育活動

まず、『成化新昌県志』と『南明石氏宗譜』の記載から、北宋期における新昌エリートの代表であった石氏の南宋期における状況からみていく。まず石公揆（43世、衍子の孫、政和6年〔1116〕進士）は、高宗朝に政事批判を担当する言路官となり、秦檜を厳しく批判して世の賞賛を浴びるものの、後に獄死する³²⁾。なお石公揆の子・晝問は、毎年200斛を宗族の貧者に支給していたという。石壻（45世、壘之の5世孫、紹興15年〔1145〕進士）は、知南劍州尤溪県事となって学校振興に努めて学宮建設、書籍購入、学田支給を実施し、また郷飲酒礼を実施

した。その後、陳挙善や史浩の推薦を受けたほか、その著『学庸集解』（四庫全書では『中庸集解』）は、親交のあった朱熹にその説が採用された。朱熹は、石磬と同安県および南康軍における同僚であり、後に石磬の墓誌を撰している³³⁾。また県城近郊の鼓山に「克齋」を建てて子弟を教授し³⁴⁾、先述した知県林安宅をまつた止水廟の碑記を撰述するなどしている（『成化新昌県志』巻7、祀典、止水廟）。石斗文（44世、待賀の4世孫、隆興元年〔1163〕進士）は、史浩の推薦をうけて枢密院編集となり、直言をもって知られた³⁵⁾。朱熹と親しい交流があり、朱熹が紹興年間に提挙浙東常平茶塩公事となった際には、石斗文が紹興の飢饉対策を補佐した（『朱子語類』外任篇）。石宗昭（45世、晝問の子、乾道8年〔1172〕進士）は、楊時に師事し、進士登第後、無為軍教授となった。史浩や趙汝愚の推薦を受け、枢密院検討や福建提刑などを歴任した。朱熹とも親交があったという³⁶⁾。加えて、『宋元学案』巻77、槐堂諸儒学案によれば、石斗文と石宗昭は、朱（熹）・呂（祖謙）・陸（九淵）の三氏に学んだとあり、陸学とのつながりも見逃せない。史浩の出身地・明州では、陸学が盛んであり、この両名を推薦した背景には、陸学という思想的なつながりもあったと考えられる³⁷⁾。

こうしてみると、史料上から確認できる南宋初期から中期にかけての新昌石氏は、史浩のような高位高官の人物の推薦を受けて活躍する者もいれば、新昌内に留まって県政に関わる者や族内の安定を図る者もおり、北宋期以来の勢力を維持しているように思われる。その一方で、当時の主要な学術勢力との幅広い交流が顕著にみとめられることは、南宋時期における石氏の特徴だといえる。これには、まず新昌県の地形上の特徴を考慮する必要がある。第一に、新昌県が属する越州（紹興）は、首都の臨安と明州を往来する線上に位置している。そして陸学は、この明州において盛んだったのであり、例えば新昌人が上京の道すがら陸学派の学者と交流する機会を得られたことは想像に難くない。第二に、新昌県が臨安や紹興から台州や温州へと続く主要陸上路上に位置したために、永嘉学派の陳傅良や葉適との交際が確認されることも

ごく当然であろう³⁸⁾。また道学派との交流については、朱熹自身、新昌県城南側に位置する南明山（石城山）に遊び、その冠の纓をすすいだという場所が現在でも濯纓亭として残っているほか、石氏の石溪義塾内にある伝心閣や石磬の蔵書楼・克齋に文章を残しており、その交流の深さがうかがえる³⁹⁾。こうした朱熹との交流の足跡は、他の学派に増してみられるが、これは、南宋後期に朱子学が正統教学として国家の追認を受けてより以降、他の学派が敬遠された結果と考えられ、祖先に遡って「発掘」されたものも多かったであろう。もちろん朱熹側にも、石氏との交流を跡づけうる多くの文章が残されていることから、親密な学術面での交流が存在していたことは疑いない。総じて、南宋時期の新昌石氏は、新昌県の地理的特徴もあって、特定の学派に偏ることなく、広汎な交流があったといえる。

さて表2は、『南明石氏宗譜』をもとに、41世（石待旦の息子の代）から48世までの新昌石氏の官僚身分保持者数を統計化したものである。目安としては、43世から44世が両宋交替期の世代となる。ただし、一般に世代が下れば下るほど、各支流間で年代の幅が広がってくるため、世代と実際の年代が必ずしも対応しないことに留意しておかなければならない。『南明石氏宗譜』は、著名な人物をのぞけば生没年の表記がなく、年代別の統計が難しい。そこで後ろの世代は、広めに48世まで統計をとり、おおよその傾向をみることにした。

本表は、どのようにして官位を獲得しているのか、「進士」から「恩蔭」「郷貢」そして「不明」にいたる優先順位で分類している。

まず「進士」（特奏名合格を含む）については、北宋期における合格者の多さが際立つが、南宋期にも数こそ北宋期にはかなわないものの、世代ごとに一定数の合格者を出していることが目につく。なお48世の2人のうち、ひとりは元朝の科挙合格者である。次に「恩蔭」は、官についた祖父や父親のお蔭によって官位を得る者、官僚の推薦や皇帝が特に恩典として授与される者、あるいは姻族の恩蔭によって官位を獲得する事例をも含んでいる。これをみると42・44世が20人を超えるものの、41世を除くその他

表2 宋代新昌石氏の官位保持者

世代	総数	進士		恩蔭		郷貢		不明		未官	
41	40	12	30.0%	2	5.0%	9	22.5%	5	12.5%	12	30.0%
42	139	6	4.3%	23	16.5%	42	30.2%	10	7.2%	58	41.7%
43	244	11	4.5%	15	6.1%	69	28.3%	18	7.4%	131	53.7%
44	319	6	1.9%	22	6.9%	39	12.2%	38	11.9%	214	67.1%
45	345	5	1.4%	12	3.5%	38	11.0%	29	8.4%	261	75.7%
46	211	3	1.4%	11	5.2%	19	9.0%	4	1.9%	174	82.5%
47	252	2	0.8%	13	5.2%	27	10.7%	17	6.7%	193	76.6%
48	282	2	0.7%	3	1.1%	25	8.9%	3	1.1%	249	88.3%
合計	1832	47	2.6%	101	5.5%	268	14.6%	124	6.8%	1292	70.5%

の世代は、いずれも10人から15人の官位獲得者を輩出していることがわかる。

また「郷貢」とは、郷貢進士すなわち科挙の地方試験である解試の通過者（挙人）であるが、北宋末以降、彼らは差役が免除され、また刑法上の優免も許されていた⁴⁰⁾。しばしば彼らは、地方官府においても吏職を得、様々な社会事業に参画することを通じて、地方に対して大きな影響力を及ぼす存在であった。以上の理由から、官僚に準じる身分を獲得した者として統計に加えている。加えて南宋期には、挙人は太学生に補せられ、その扱いは一括りにされることが多い。『南明石氏宗譜』にも「郷進士に挙げられて太学生に補せられる」という事例が多く、太学生も同一カテゴリーに含めることとした。さらにいえば、「邑庠生」（県学の学生）だったという人物が47世に1人、48世に8人おり、これも挙人に準じる存在として統計に加えているが、この邑庠生がいつの時代の学生なのかははっきりしない。彼らは、南宋時期に各世代およそ10パーセント前後で推移しており、挙人となって以後、官職を得る者もいれば、そのまま隠居して出仕しない場合も多い。

「不明」は、どのような経緯で官位を得たのかが判然としないもので、その多くが「仕えて〇〇（下級の文散官名）に至る」とだけ表現されるものである。また「奏補」と表現されるものについても、必ずしも恩蔭であると断定しかねるものもあり、このカテゴリーで集計して、結論を保留した。

総じて、44世から48世の官位獲得者の割合を参考にすれば、南宋期の新昌石氏は、進士及

第者が世代総数の1.2パーセント前後、恩蔭出身者が4.4パーセント前後、郷貢進士が10.4パーセント前後で推移し、これに「不明」カテゴリーを加えて各世代の総数の中で20パーセント程度の官位保持者がいたことになる。地域内外における政治的・学術的な活動や交流に勤しみ、官位保持者の安定した再生産を行う石氏は、新昌県の地方エリートとしての地位を確立していたということができよう。

ところで、南宋期の新昌県には、石氏以外にも北宋期の石溪義塾のような私立の教育施設を中心に、幅広い学術交流を行っていた事例がある。『成化新昌県志』巻13、寓賢には、3人の学者との交流が記録されている。朱熹は、新昌県を訪れていた際、石氏のほかに梁氏や呂氏との交流があった。また陳傅良は、袁氏に招かれて私塾の講師となったほか、黄度の家に滞在して石氏や呂氏と交わり、多くの子弟が彼に従ったという。葉適も石氏・呂氏の家に滞在して親交があった。こうした新昌県内における学術交流を『宋元学案』からみると表3のようになる。新昌県内の有力氏族出身者と朱子学ないし永嘉学派との交流が広汎かつ世代を跨いで行われており、先述した石氏の特徴と似通っている。このように新昌県の地域学術は、諸学派が混在するような土壌のもとで育まれたのである。

そして、南宋後半期に注目されるのが陳氏の私設教育機関である「桂山西塾」と「桂山東塾」における教育活動である。『成化新昌県志』巻6、義挙、桂山西塾および桂山東塾の項には、関係者の書き残した多くの記録が収められている。これに同巻12、郷賢、義士陳翁・義士尚幹陳

表3 『宋元学案』にみる新昌県の学術

姓名	学統・交友関係など	典拠
石 斅	【朱熹と交友】	卷49, 晦翁学案 (下)
石斗文 石宗昭	【陸九淵の門人】兄弟で朱・呂・陸三氏の門に学ぶ。	卷77, 槐堂諸儒学案
石余亨	【石氏統伝】代々講学家である石氏の家系を維持。	卷77, 槐堂諸儒学案
黄 度	【陳傳良の学侶】周南は娘婿で、後に共に偽学党に加えられる。葉適が墓誌を撰述。	卷53, 止齋学案
黄 章	【陳傳良の門人】葉適が墓誌を撰述。	卷53, 止齋学案
黄奇孫	【韓性の門人 (韓翼甫再伝)】兪浙・石余亨・韓性に師事。	卷64, 潜庵学案
兪 浙	【朱学統伝】宋滅亡後、門を閉ざして講学。朱子学を尊崇。	卷49, 晦翁学案 (下)
呂声之 呂冲之	【陳傳良の門人】蔡幼学の友人。	卷53, 止齋学案
張 渭 張 汾	【楊簡の門人】呂祖謙・楊簡に師事。	卷74, 慈湖学案
王 燾	【牟子才に同調】李芾・趙卯癸・唐震と交友関係。	卷80, 鶴山学案
潘 音	【呉澄の門人】	卷92, 草廬学案

公の記述も参考にしつつ、その経過・内部構造・交流などをみていくことにする。

まず両書院の概要を述べておこう。嘉泰3年(1203)、県城の東南15里(7.5キロ)にある平壺の地(現在の地名は平湖村)において、“邑士”の陳祖が義塾を設立した⁴¹⁾。陳祖は、幼い頃に父親を亡くし、兄の陳綜が早世すると、みずから家事を治め、母親に孝養を尽くし、一族の親睦を図る。ある日、人生を蓄財に捧げることを潔しとせず、善行を行ってこれを世人と享受しようと思ひ立ち、義塾の設立に踏み切るのである。その規模は、麗沢堂や13の齋をはじめとして、数百家屋が並ぶまでになり、桂山西塾と号する。学生が入門する際の進物は年ごとに万緡を数え、学校経営の出費には惜しむことがなく、規律ある教育カリキュラムを有し、食事や生活用品および使用人や給仕など、いずれも完備されていたという⁴²⁾。また陳自の認識によれば、この桂山西塾は、開禧年間(1205-1207)頃に最盛期を迎えたようである⁴³⁾。そうして、陳祖の西塾設立から約30年が経過した紹定4年(1231)には、族孫の陳雷が陳祖の遺志を継いで、西塾の側に桂山東塾を建設、来学者は数百人にのぼり、多くの科挙合格者を輩出したという。この陳雷も陳祖同様、幼くして父親(陳大栄)を亡くし、母親の何氏が養育にあたった。後に恩蔭によって官位を得たが、史大資の辟召を辞

退するなど、出仕せず、その代わりに義田・義役・義棺・義阡(公共墓地)・義倉・義漿(公共飲料水)・橋梁建設や貧民救済など、一族や郷里のための社会事業に熱心に取り組んでいる。陳

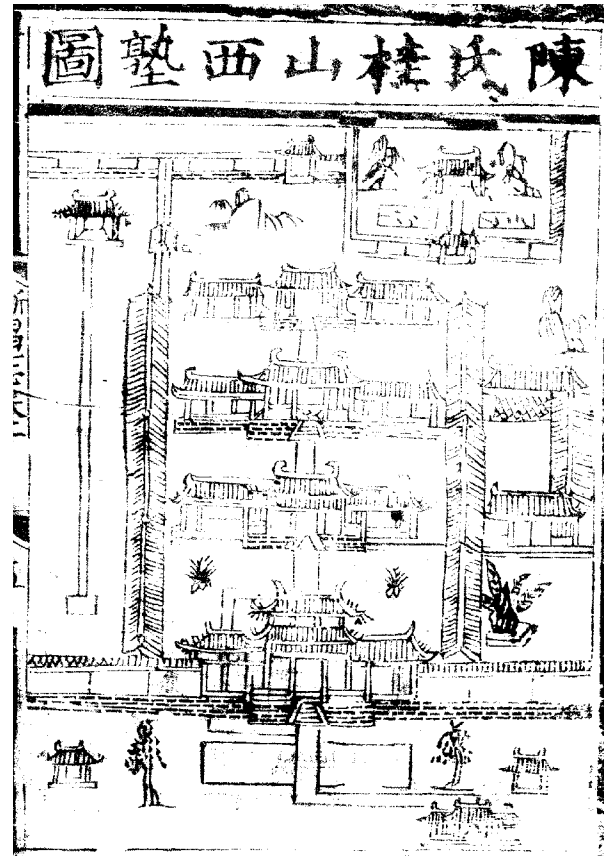


図2 陳氏桂山西塾図

雷は、徳祐元年（1275）に77歳で世を去り、“里生”の兪億ら76人がその祭祀を執り行っている⁴⁴⁾。この陳氏は平壺に居住していることから、第1章の表1より、五代末に新昌に移住してきた陳孺文の後裔にあたる。陳祖や陳雷以外の陳氏については不明であるが、長らく新昌県平壺村に集住し、挙業（科挙の受験勉強）に努めつつ、族内経営や郷里社会の公共事業に力を入れてきた在地エリートだったといえる。

次に、両書院の内部構造について検討する。陳祖が建てた桂山西塾の内部構造については、『成化新昌県志』所載「陳氏桂山西塾図」があるほか（図2参照）、胡楊「桂山西塾記」（『成化新昌県志』巻6、義挙、桂山西塾）からうかがうことができる。まずは胡楊の記録をみよう。門（外門を指すのであろう）をくぐれば轍5つ分の広さをもつ道が続いている。中には、うっそうと枝葉を茂らせる槐樹が植わり、池は静かに水をたたえ、青々としたハスやセリ、バショウが満ちていた。道を数十段も登ると、門（中門か）が高々と聳え立っており、「書院」と記された額が掲げられている。門をくぐれば、そこが書院の最も主要な建物である「麗沢堂」の空間となり、東に教師（広文）の在所が、西に賓客の宿所があった。東階段（阡階）から東側には、「学古」があり、その後ろは「崇徳」と相対している。西階段（賓階）から西側が「通藝」で、その傍らには大樹が生い茂っている。「学古」「崇徳」「通藝」などの名称は、先に13あったとされた“齋”のことを指すのであろう。麗沢堂の前には、カツラが叢生し、冷泉が清らかに両廡（堂に附属した細長い建物）をめぐる。東廡の側には「富文」「約礼」「致遠」が、西廡の側には「顕道」「立義」「上達」があったという。続いて「約礼齋に入れば、そこが楼に昇る道である。その道は神祠と向かい合っている」という記述がある。これは、『成化新昌県志』巻6、義挙、桂山西塾という「衆緑楼」のことを指すと思われるが、この楼の位置関係や「神祠」の祭祀対象などは不明とせざるを得ない。胡楊は、衆緑楼から遠景を望めば、意気を盛んにして心を爽やかにするに十分で、休日の集会場所だとみなしている。さらに衆緑楼の下には「尚志」、続いて「観善」「成己」「友仁」へといたる。友

仁齋の前が富文齋の「炉亭」にあたり、厨房や浴室および「舎」（学生の宿舎か）などは友仁齋の西辺にあったという。胡楊はいう、書院の家屋をあわせれば数百にのぼるが、その西側にあったという陳君の家内の堂は、柱が傷ついて塗装もはげ、壁も汚れてしまっている。ここに、義に厚く、己を薄くする陳君の態度をみることができるのだ、と。

ところで、胡楊の記載する書院の構図と「陳氏桂山西塾図」とを比較すると、いささか構造が異なるようである。外門から中門へ、そして中央建築の麗沢堂と両脇の東廡・西廡がある空間は、ある程度まで共通するものの、通藝齋の側にある大樹、衆緑楼や神祠、ないし厨房をはじめとする生活空間などが記載されず、書院西側にあったという陳家の部分には、弓射を習う「射圃」が描かれている。『成化新昌県志』には、現在の桂山西塾についての記載はないが、『万曆新昌県志』には、桂山東塾ともども現在は廃されているという記述がある（巻7、書院、西塾・東塾）。明代までこの書院が存続していたとは考えられず、また本図には、建物に何も説明が附されていないことから、後世、その跡地や残存していた建築物の状況、および明代当時に一般的に通用していた書院の構造が本図の作成に影響を与えていると考えられる。

一方の桂山東塾は、「諸孫の陳雷が先志を継いで書院の拡張を試み、桂山に土地を占い、その規格や配置を以前の倍とし、家屋100棟を建て、寝所や収納庫などいずれも完備されていた。その中には堂三間を作り、左右に200～300人が座ることができた。これを師友淵源堂と呼んだ」という⁴⁵⁾。『成化新昌県志』巻6、義挙、桂山東塾にも、東塾が「師友淵源堂」という中心的建物と20の齋によって構成されているというから、その規模は、桂山西塾を上回るものであったようである。『成化新昌県志』には「陳氏桂山東塾図」が載録されているが、これも桂山西塾同様、詳しい建物の説明はなされていない。さて、「師友淵源堂」については、先述した新昌県学にも「師友淵源祠」という類似の施設がみられた。この「師友淵源堂」についての記録を残した蔡杭は次のように述べる⁴⁶⁾。三代の教えは孔子へと継承され、宋代に入って周惇

頤から二程へと受け継がれた。中興以後、朱熹・張栻・呂祖謙ら一時の師友たちが会して異説を解明し、衆説は修正され、異端は斥けられたのである。「そもそも道の大きい源は天より発して師友に託されるもので、道が頼みとするのは滅びることのないように手助けを受けることだ。どうして一日として道を廃することができようか。これこそ陳君が淵源堂を作った理由である」。新昌県学にせよ、陳氏の書院にせよ、この「師友淵源」という名を冠した施設には、師友を介した道統の継承を重要視する態度がうかがえる。

桂山西塾・桂山東塾の交流の拓がりは、『成化新昌県志』が収録する関連碑記からうかがうことができる。以下の記事から、すでにみた設置の経緯や内部構造以外に明らかとなる諸特徴について考えることとする(表4)。

まず執筆者について、②黄庭や③王爚は、新昌県出身であり、前者は礼部尚書黄度の弟、後者は南宋後期の宰相である。また諸葛興は、『宝慶会稽統志』巻6、進士に嘉定元年(1208)の合格者として掲載されており、紹興出身であることは間違いない。これに①胡楊(台州天台県出身)、⑦楊幼度(台州天台県)、⑧王持屋(温州楽清県)といった新昌県を縦断する主要幹線上、ないし⑤陳自(婺州)、⑥鄭清之(明州)などを加えて考えれば、広く浙東地域出身者の人的交流の存在が確認できる。任地という点では、朱熹のかつての赴任地でもあった南康軍(②・⑦)や饒州(⑧)といった江東地域との

つながりがみとめられよう。

ところで、⑤には「台越の名士として方秉哲、王爚、諸葛興が師となった」とあり、⑥にも同様の文言がみえるものの、方・諸葛・王の進士合格年がそれぞれ嘉泰2年(1202)・嘉定元年・嘉定13年(1220)であることを考えると、むしろ学生というべきで、教師というのはやや誇張に過ぎる⁴⁷⁾。この3人は、何らかのかたちで桂山西塾と関係があり、いずれも進士合格を果たした。陳雷が義塾を新たに作る際、この実績は格好の“宣伝要素”になったのであろう。このほか⑥には、東塾に陳一中(明州鄞県出身)と陳自が師として招かれたとあるが、新昌陳氏との関係は、はっきりとしない。また⑧には、楽清県知事の俞瑞(新昌県出身)を仲立ちとして、多くの知人が陳氏義塾に集ったという。彼は、科挙受験の際に知貢挙であった真徳秀から才能を認められた人物だとされる⁴⁸⁾。2ヶ月ながらも道学派として副宰相にまで至った真徳秀の影響力は大きく、これもまた、宣伝の一環だったと考えられる。

科挙合格者の輩出を謳い文句にする反面で、科挙中心的な学問に警鐘を鳴らすような叙述がみられるのも特徴である。②には「詞章の試験ばかりを思わず、威徳濟世の用を期することが重要である」、また④には「もっぱら義を志して利におよばなければ、有司の試験を受けても、きっと平時に学んだことをのべて、聖人に背くようなことはなく、仕官してもきっと国に忠をつくし、民に恵みをほどこし、自己の利益

表4 陳氏義塾の関連記事

	No.	撰者ほか	題名	撰者の附帯情報(年次は作成時)
桂山西塾	①	胡楊	「桂山西塾記」	天台
	②	黄庭	「陳氏西塾題名記」	嘉泰3年(1203)。迪功郎新南康軍学教授
	③	王爚	題名なし	開禧3年(1207)
	④	諸葛興	題名なし	迪功郎新臨安府余杭県主簿。
桂山東塾	⑤	陳自	「桂山東塾記」	紹定4年(1231)。儒林郎新台州法参軍
	⑥	陳卓	題名なし	撰。淳祐5年(1245)。資政殿学士正議大夫提挙臨安府洞霄宮。
		張即之	同上	書。朝請大夫。
		鄭清之	同上	題蓋。少保觀文殿大学士體泉觀使兼侍読衛国公。
	⑦	楊幼度	題名なし	跋。淳祐6年(1246)。新権発遣南康軍兼管内勸農事
⑧	王持屋	題名なし	淳祐6年(1246)。迪功郎新饒州学教	
⑨	杜幼存	題名なし	淳祐12年(1252)。太学進士。	

をはかろうとはしない」という。これに関連して⑧には、陳氏の義塾が西山読書式——西山は真徳秀の号——を掲げ、「浙以東、茲に盛んたり」と述べられ、道学派の新昌県への浸透を指摘する。道学派は、“為己の学”を提唱し、科挙から一步遠ざかった言論を特徴とするが、陳氏の義塾にも同様の傾向がみてとれる。

また陳氏の義塾は、かの石溪義塾の後継として位置づけられていた。たとえば⑤では、義塾の創設は古く、その兆しは石溪の東におこり、のびひろがって平壺に結実したという。⑨には、淳熙12年（1252）のこととして、撰者の杜幼存のもとに友人の石維翰なる人物が訪れ、平壺の陳氏義塾が石溪の遺跡を継いだものだと述べるくだりがある。また⑥には、石溪と桂山の間は、わずかに数里の距離であり、時が異なってもその道は異なっていないと述べる。撰者たちは、⑧の王持屋がそうしたように、数里を隔てた石溪書塾とそこから輩出した（とされる）4人の宰相たちを脳裏に浮かべながら、陳氏の義塾にその継承者としての姿を見出していた、ないしは期待していたのである。

これに関連して、桂山西塾には『同舎題名録』が、桂山東塾には『叢桂録』という名簿が存在していたという⁴⁹⁾。②では、石溪書塾にあったという題名碑刻が今や風化・磨滅してしまい、4人の宰相と范仲淹や蘇軾の名を捜し出すのが精一杯だと嘆く前半部分に続けて、士大夫たちが古人の盛徳を志して、陳氏の義塾とその学問の受容者たちが善意をもってこれを永遠に受け継ぎ、来たりし者が彼らの存在をおもいはかることのできるにしよう、という。そして、そのためにも「題名を刻むことは、実に欠かすことができないのだ」と締めくくる。構成員の人間関係の再生産に寄与すべく、名簿が作成されたことはもちろんだが⁵⁰⁾、そのみならず、先述したような師友による学統の継承という意味からも、このような名簿記録が必須だと認識されていたのである。

本章の締めくくりとして、新昌県学と陳氏義塾との関係について述べておきたい。新昌県学は、南宋初期より歴代知県の尽力によって不断の整備・拡充が加えられ、南宋後半期には、学生の就学施設として十分な規模を備えていた。

また祭祀施設の設置や儀礼の挙行を通じて、郷里の秩序を表象しうるような空間が形成されており、当該地方のエリート階層の関与がうかがえた。ただし、学術・教育的活動における新昌県学が果たした役割については、関連記録が少なく、判然としない。その一方で、新昌エリートの在地における教育活動・学術交流は活発であり、地域学術の維持・継承に十分な役割を担ったと考えられる。とりわけ陳氏義塾の規模は大きく、関係者は浙東を中心として江東地域にまでおよび、その階層も下級官吏から朝廷の要職者にいたるまで、幅広い支持を得て活動を展開した。新昌県学がその内部機構を充実化していったとはいえ、その学術・教育活動の主導権は、なお陳氏義塾を代表とするような民間の教育施設にあったのである。

IV 結びにかえて

本稿では、宋代新昌県を事例として、地方官学と私立書院の相互関係に留意しながら、地域の教育空間がどのように形成されていたかについて考察した。新昌県では、北宋期には石溪義塾が、南宋期には有力氏族がそれぞれ個別に教育活動を展開すると同時に、陳氏義塾のような、石溪義塾に比肩しうるような規模の私立書院が設立され、地域の教育や学術活動に大きな役割を果たしていた。一方の県学はといえば、南宋期以降、地方官府による不断のテコ入れを経て教育施設としての体裁を整えたが、地域の学術を牽引するような勢力にはいたらなかった。新昌県の教育や学術活動は、宋一代を通じて、民間の教育施設が大きな役割を果たしていたのである。

とはいえ、新昌県学の意義を過小評価することはできない。近藤一成氏の研究によれば、北宋末期、地方州県学に三舎法が施行されると、その誘引剤として設けられた徭役優免と法制上の特権を獲得すべく、学生が大量流入した。この三舎法は、ほどなくして廃止され、学生に対する優免権も罷められたが、地域に密着したエリート層が“士人”として認知される契機になったという⁵¹⁾。また高橋芳郎氏によって明らかに

されたように、宋代の挙人や学生は、けっして固定化された終身身分ではなかったが、その社会的地位や法的身分は、明代に先行する実質を備えていた⁵²⁾。南宋期には、地方官学を媒介として、地方官府と在地エリートとの間に密接な関連が存在したのである。ひるがえって南宋後半期の新昌県学においては、学舎整備と内部機構の充実ともなって就学機能が上昇し、また先賢祠が設置されて、石氏や黄氏といった名族がその管理にあたり、郷飲酒礼が挙行されていた。ここにも同様の背景が見出されよう。表2より、南宋時期になって石氏の官位獲得者数が安定してくることを確認したが、これが学校制度の整備と何らかの関連を有するのかどうかについては、未解明のままとなった。他の新昌エリートの動向も併せ参照しつつ、改めて論じたい。

なお、北宋・南宋を通じて、新昌県の私立の教育施設に科挙に対する志向がみられたことは興味深い。とりわけ南宋後期には、当該地域に道学派の影響が及んでいるが、この傾向に変化はない。この背景には、新昌県が属する浙東地域の思想、すなわち永嘉学派や明州といった地域の学術的傾向が存在したと考えられる。しかし、こうした科挙に対する志向は、私立教育施設の目的を明確にするものではあったが、国家制度に影響を受けやすいという性質も兼ね備えていた。したがって宋元交替を経て科挙が廃止されてしまうと、新昌県の学術的活動は著しく衰退してしまうのである。こうした傾向が新昌県独自のものなのかどうかについては、今後さらなる事例の集積が必要であろう。

その一方で新昌県学は、元朝治下においてもその整備・改修が継続して行われた。また延祐7年(1320)には、学校の儀礼活動で使用される祭器が新たに作成されており(『成化新昌県志』巻5、学校、元祭器)、新昌県学が祭祀・教育活動を行っていたことを示す。新昌県の有力名族たちが科挙廃止という冬の時代をやりすごし、後代へと生き延びていくことができた背景には、県学の存在が大きかったと考えられる。この背景には、地方学校を介した「儒戸」の把握という元朝の統治政策が影響していたと思われるが、その具体的検討については、後稿を期

したい。

注

1. 士大夫・士人の定義については、高橋芳郎「宋代の士人身分」『宋・清身分法の研究』北海道大学図書刊行会、2001年を参考にしている。ただ本稿では、特に指定しない限り、いずれも士大夫と呼んで区別しない。
2. 代表的な研究として、Robert P. Hymes, *Statesmen and Gentlemen: The Elite of Fu-chou, Chiang-hsi, in Northern and Southern Sung*. Cambridge University Press, 1986が挙げられる。
3. Linda Walton, *Academies and society in Southern Sung China*, University of Hawai'i Press, 1999, 陳雯怡『由官学到書院—從制度与理念的互動看宋代教育的演變』聯經出版, 2004年などを参照。
4. 例えば、寺田剛『宋代教育史概説』博文社、1965年、袁征『宋代教育——中国古代教育的歴史性転折』広東高等教育出版社、1991年、李弘祺『宋代官学教育与科挙』聯經出版、1994年などが挙げられる。
5. 拙稿「宋代「同年小録」考——「書かれたもの」による共同意識の形成」『中国——社会と文化』17、2002年、および同「宋代郷飲酒礼考——儀礼空間としてみた人的結合の〈場〉」『史学研究』241、2003年を参照。
6. 前掲註3陳雯怡著書を参照。
7. 元朝における「儒戸」と学校制度に関する研究として、牧野修二「元代の儒学教育——教育課程を中心にして」『東洋史研究』37-4、1979年を参照。
8. 宋代の州県学に関する全国的な研究としては、周愚文『宋代的州県学』国立編訳館、1996年を参照。
9. 国会図書館所蔵のマイクロフィルムを利用した。
10. 陶晉生「教育与興盛——新昌石氏」『北宋士族——家族・婚姻・生活』中央研究院歴史語言研究所、2001年。
11. 『南明石氏宗譜』は、清代の石右軍主修、石於信編纂、12冊(14巻)、北京図書館出版

社2002年影印清乾隆50年（1785）慶雲堂木活字本を使用した。本譜には、朱熹および周必大の序がみえるが、いずれも文集には収められていない。ただ第2章で論じるように、石氏と朱熹との間には親密な交流があったほか、周必大は、新昌石氏の一族である石晝問（44世）と交際があり、彼のために墓誌を撰している（『文忠集』巻75、「循吏石大夫〔晝問〕墓誌銘〔嘉泰三年〕」）。そこには「君伯父公弼在徽宗時，光顯於朝，著譜牒，歴歴可考」とあり、すでに北宋末期の石公弼が族譜を編纂していることがわかる。また『南明石氏宗譜』中にも、石正杰（47世）が「自叙石氏家訓並譜序」、石奕泰（48世）にも「率宗人立祠奉祀，修集世牒」とあり、族譜の編纂が後世にも伝わっていることがうかがえる。以上より、『南明石氏宗譜』は同時代の編纂物ではないが、その情報は宋代より伝わる内容を含むと判断した。

12. 本稿でいう「氏族」とは、父系出自の集団を指している。
13. 成尋が越州の剡県から新昌県を通過した記録は、『參天台五台山記』巻1，延久4年（1072）5月10日から12日にみえる。平林文雄『參天台五台山記：校本並に研究』風間書房，1978年を参照。
14. 剡県は、北宋末宣和3年（1121）に嵊県と改名される。本稿では、煩雑を避けるため「剡県」を通用する。
15. 『太平寰宇記』巻96，江南東道八，新昌県。
16. 『南明石氏族譜』の石待賀と『成化新昌県志』の石賀の事跡は共通するものがあり、あるいは輩行字を除いただけで、同一の記事を述べている可能性や、『南明石氏族譜』が『成化新昌県志』をみて、後世に石賀を石待賀だとみなして記録した可能性が考えられる。ただ、2つの記事の年代に隔たりがあり、今は両記事を別個に扱う。
17. 范仲淹の慶曆改革，およびその中で実施された科挙・学校の改革については、荒木敏一「范仲淹・宋祁の科挙改革案」『宋代科挙制度研究』同朋舎，1969年，近藤一成「北宋「慶曆の治」小考」『史滴』5，1984年を参照。
18. 書院内の祭祀空間に関しては、高明士「書

院的「廟学」化」『中国教育制度史論』聯経出版，1999年を参照。

19. 石溪義塾から出た進士登第者の名前は、義塾に建てられた韓績（韓維の弟）の手による題名石刻に記載されていたものの、南宋期には、すでにその存在が確認できていない（『嘉泰会稽志』巻18，拾遺，万卷堂）。また，後章でも論じるが，後世の新昌エリートたちは，石溪義塾の記録が非常に少ないことを嘆いて，「当時はまだこのことを記録する者がおらず，門人や弟子たちにもその盛徳を発揚することができなかつた」と述べる（『成化新昌県志』巻6，義挙，石溪義塾）。杜衍ら4人の宰相が門人であり，程顥が教師となって育成にあつたという時系列を無視した故事が存在する一方で，新法党系の士大夫や在地名族との交流がほとんど記録に残らないという状況からは，記録者の叙述の偏向性を感じざるを得ない。あるいは，科挙登第前の情報であるとみなされて，他の記録に残されにくくなってしまったとは考えられないだろうか。
20. 徽宗朝の科挙・学校改革については，近藤一成「蔡京の科挙・学校政策」『東洋史研究』53-1，1994年を参照。
21. 方臘の乱については，須江隆「宋代における祠廟の記録——「方臘の乱」に関する言説を中心に」『歴史』95，2000年を参照。
22. 秦檜政権期における文教政策と明州系士大夫の活動については，前掲註5拙稿「宋代郷飲酒礼考」において，論じたことがある。
23. 『成化新昌県志』巻13，来宦，林安宅。
24. 職事人とは，宋代の学校の職員で，学生の中から選任される非命官である。龔延明『宋代官制辞典』中華書局，1997年を参照。
25. 師友淵源祠の記述は，これ以外に残されていないので詳細は不明。『成化新昌県志』巻5，儒学をみる限り，少なくとも明代にこの施設の存在は認知されていなかった。
26. なお，中国に渡来した宣教師の記録から明代の積奠儀礼について検討した矢澤利彦「孔子崇拜儀礼（積奠）について」『思想』792，1990年によれば，「よく肥えた動物の肉を儀式後に放置するはずがなく，長官をはじめとする参加者がそのおこぼれに与つたことは疑

- いない」という。
27. 前掲註5拙稿「宋代郷飲酒礼考」を参照。
 28. 『成化新昌県志』巻5, 儒学, 郷賢祠所引王世傑「先賢祠記」。
 29. 宋代の先賢祠・郷賢祠に関しては, Ellen Neskar, “The cult of worthies: A study of shrines honoring local Confucian worthies in the Sung Dynasty (960-1279)”, Ph. D. dissertation, Columbia Universityを参照。掌祠職については, 蘇州の范文正公祠に関する遠藤隆俊「宋代蘇州の范文正公祠について」『中国の伝統社会と家族〈柳田節子先生古稀記念〉』汲古書院, 1993年があるほか, 拙稿「宋代先賢祠考」『大阪市立大学東洋史論叢』15, 2006年参照。
 30. 前掲註4袁征著書を参照。
 31. 北宋より金元期の路レベルの学校管理体制を検討した近年の研究として, 櫻井智美「儒学提挙司の起源と変遷——兼論宋金の学校管理」『阪南論集(人文・自然科学編)』37-4, 2002年が挙げられる。
 32. 『成化新昌県志』巻12, 郷賢, 侍御史浩軒先生石公。
 33. 『朱熹集』巻92, 「知南康軍石君墓誌銘」。
 34. 『成化新昌県志』巻9, 第宅, 克齋。
 35. 『成化新昌県志』巻12, 郷賢, 編脩緝齋先生石公。
 36. 『成化新昌県志』巻12, 郷賢, 編脩緝齋先生石公。
 37. 史浩の推薦した人物とその地域的・思想的特徴については, 岡元司「南宋期温州の地方行政をめぐる人的結合——永嘉学派との関連を中心に」『史学研究』212, 1996年を参照。
 38. 『成化新昌県志』巻13, 寓賢, 陳傳良および葉適。
 39. 『朱熹集』巻77, 「克齋記」, および同巻81, 「跋張敬夫為石子重作伝心閣」。
 40. 前掲註1高橋芳郎論文を参照。
 41. 『成化新昌県志』巻6, 義挙, 桂山西塾, および同所引胡楊「桂山西塾記」
 42. 『成化新昌県志』巻12, 郷賢, 義士陳翁
 43. 『成化新昌県志』巻6, 義挙, 桂山東塾所引陳自「桂山東塾記」。
 44. 『成化新昌県志』巻12, 郷賢, 義士尚幹陳公。
 45. 『成化新昌県志』巻9, 第宅, 師友淵源堂。
 46. 『成化新昌県志』巻9, 第宅, 師友淵源堂。
 47. 『宝慶会稽統志』巻6, 進士を参照。
 48. 『万曆新昌県志』巻11, 廉介, 兪公美。
 49. 『成化新昌県志』巻6, 義挙, 桂山西塾および桂山東塾
 50. 前掲註5拙稿「宋代「同年小録」考」を参照。
 51. 前掲註20近藤一成論文を参照。
 52. 前掲註1高橋芳郎論文を参照。

Educational Promotion and Elites in a Local City in Song 宋 China: A Case Study of Xinchang 新昌 Prefecture

Tomoya YAMAGUCHI

The literati (士大夫) of the Song Dynasty was going to establish a helm in a district through building various relationships such as marriage and participating in social work. On the other hand, the local government aimed to control them through an examination (科举) and a district school. The purpose of this paper is to clarify educational activities of local elites and the maintenance of prefectural schools by the local government, with Xinchang (新昌) Prefecture as an example.

Regarding the trend of the leading family of Xinchang Prefecture, the Shi (石) family's activity was remarkable. From the Northern Song, they exerted themselves for educational activities, and produced many examination elected candidates, whether were family or not. They formed interpersonal relationships, whether in hometowns or in central politics. In the Southern Song period, the Xinchang elite families except the *Shi* family concentrated on educational the activities too, and built intellectual networks in a private academy like the *Shi* family. On the other hand, promotion of prefectural school was not positive in the Northern Song period. But in the Southern Song, the Xinchang government promoted the maintenance of prefectural schools and Confucian rites actively.

With the diffusion of examination in Song society, at the same time, systematic limits were disclosed that produced enormously, unsuccessful intellectuals unavoidably. Therefore, it is regarded as a time when the elite class was formed in district societies. The central government implemented policies which accommodated them in prefectural schools, and the local office promoted maintenance of schools to meet their demand. While the local elite tends to flow into private academies, improvement of prefectural schools was the measure in order to seat them somehow or other.

Keywords : Xinchang Prefecture, local elite, private academy, prefectural school, ritual space